



〈随時掲載〉

東北2つの巡礼

亡き人を追慕し喪失の苦しみや悲嘆を癒やす。祈願の成就、あるいは信仰の証しを得る。古来、さまざまな願いをのせて行われてきた巡礼。東日本大震災の被災地では、牧師や僧侶が仏教、キリスト教の巡礼路を開発・再興し、被災地支援と絡めながら活動を続ける。

点状する足跡

雨が静かに降る。肌寒い春の日の朝、日本基督教団石巻栄光教会の牧師、川上直哉さんが宮城県石巻市の中心部から車で出発した。東日本大震災で支援を続けるキリスト教団体、東北ヘルプの事務局長。同乗するのは浄土宗僧侶の吉水岳彦さん。東京・山谷での炊きだしなど貧困問題に取り組む「ひとさじの会」事務局長で、被災地でも活動してきた。この日、2人の事務局員が目指したのは、岩手、宮城県に点在するキリシタンの足跡だ。

キリシタンは長崎や熊本など九州での存在が有名だが、東北でも多くの殉教者が出ている。川上さんは、海外から支援に来たクリスチャンに「東北キリシタン」について教えられ、被災

キリシタン殉教と観音霊場

地の「交流人口」増加を図り記憶の風化に抗したいと考え、巡礼を発想した。

川上さんが案内役となり2015年度に東北キリシタンツアーを開始。今年は海外から巡礼団も予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大で中止になった。

晴れ間が出始めた午後、車は岩手県一関市藤沢町の大籠地区へ。一帯は西国から製鉄技術と

被災地支援と人間の尊厳

三経塚

宮城県登米市東和町の米川地区。18世紀前半の享保年間、製鉄に携わっていた潜伏キリシタン120人が処刑された。戦後発見された古文書で、この殉教が分かった。埋められたのは3カ所で三経塚というが、原形が残るのは海無沢三経塚だけだ。

坂道を上る。中腹には処刑が行われた「切捨場霊場」。丘の上の徒歩のよきと福田さん。参加に着くと、朽ちた老木の前に後世に立てられた十字架が。2人こで娘が流されたからお経を「がたがた」んだ。風は強く、木々がざわめく。

捕らえられた潜伏キリシタンは信仰を放棄しなかった。仙台藩は製鉄産業のために他の多くの信者を見逃した、と川上さんは考える。「生き残った人たちは新たな意味を見いだす。サポーター危険を冒し殉教者を埋葬したのでしょう。彼らは一人一人の命が大切だと考えた。人間の尊厳を守ったのです」

信仰的遺産

今回、川上さんから学んだ吉水さんも仏教の巡礼を被災地で「ひとさじの会」メンバーが支援に入った仮設住宅で「仏壇も位牌も流され、手を合わせる対象がない」との話を聞き、巡礼に思いを巡らせた。

気仙三十三観音霊場。岩手県大船渡市、陸前高田市、住田町。不透明な先行きの中、生死や心の在り方に関心が高まっている。信仰と社会の接点を考える



キリシタンが大量に処刑された「地蔵の辻」で手を合わせる僧侶の吉水岳彦さん(右)と牧師の川上直哉さん(岩手県一関市藤沢町の大籠地区)



殉教した潜伏キリシタンが埋められた海無沢三経塚。川上さん(左)から説明を受ける吉水さん(宮城県登米市東和町の米川地区)



気仙三十三観音霊場を徒歩で巡礼中の参加者。東日本大震災犠牲者への祈りもこめる。2019年3月、岩手県大船渡市(福田亮雄さん提供)



小雪が舞う中、気仙三十三観音霊場を徒歩で巡礼する参加者。2019年4月、岩手県陸前高田市(福田亮雄さん提供)